



ミメーシス論：丸山眞男と敗戦後文学

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-06-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山崎, 正純 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00002612

ミメーシス論 —— 丸山眞男と敗戦後文学 ——

山 崎 正 純

I 「超国家主義の論理と心理」

——ミメーシスの二つの層

プラトンが共和国から芸術を追放したのは、なぜだったか。アリストテレスが芸術に自然模倣という形に定式化した芸術観が、ミメーシス (Mimesis) の歴史的概念としての始原である。すなわちプラトンによる芸術追放は、政治支配の理性による芸術の追放であり、支配の暴力 (Gewalt) によるミメーシスの排除にほかならなかった。

アドルノは『美の理論』において次のように述べている。

芸術は魔術的段階の残滓である自己の魔力が、世界の非魔術化によって直接的に感覺的に現存することを否定されながらも、こうした契機を消し去ることもできないという

事実によって動かされている。芸術のミメーシスはもっぱらこうした魔力という契機によって維持されるものなのであるが、ミメーシスのものは自らの存在を通して自らにとって絶対的なものとなった合理性に批判を加え、その批判によってその真実を手に入れる。

〔『美の理論』⁽¹⁾〕

「自らにとって絶対的なものとなった合理性」は、自／他の境界を固定し、同一性によって境界を区分し、区分することによって同一性の確保が図られる状態を維持している。「世界の非魔術化によって」境界線が引かれ確定された領域が、一つの体系として秩序付けられ、複数の同様の領域が対等の権力主体として相互に承認をおこなうとき、人は主体となり、国民となつて、主権国家体系を支える主権者となる。

だが「芸術のミメーシスはもっぱらこうした魔力という契機

によって維持されるもの」であるかぎり、人を理性的な主権者として主体化することがない。むしろミメーシスは、自然の模倣であり、自然への主体の融解なのであって、芸術における美的の仮象としてプラトンによって厳しくその共和国から排除された。「保管されて来た魔術的契機を真理と見なす要求を断念することによって、美的仮象は美的真実へと書き換えられる。かつて本質に向けられていた精神の行動方式の遺産のうち芸術の生き永らえるチャンスがひそんでいるが、このチャンスは本質的なものを認識する仲立ち、つまりそれをタブー化することが合理的認識の進歩と同一視されているところの本質的なものを、認識する仲立ちとなる」（『美の理論』）のである。マキャヴェリは、共和制を支えるものが、市民による武装集団、死を賭して自国の主権を防衛する民兵組織であると述べている。そこにある市民的な愛国心もまた、ミメーシスのタブーの上に構成された理性の一形態にほかならない。

「ヨーロッパ近代国家はカール・シュミットがいうように、中性国家 (Ein neutraler Staat) たることの一つの大きな特色がある。」と丸山眞男は述べる。丸山が「超国家主義の論理と心理」（『世界』一九四六年五月号）で述べたことの核心がここにある。日本の超国家主義とは、公と私とが明確に分離しないまま融解

し、形式的合理性と主観的倫理性のいずれをも欠いた構造を持つものと丸山は見た。すなわち「日本の国家主義は内容的価値の実体たることにどこまでも自己の支配根拠を置こうとした」のである。

丸山眞男によるこの東西国家比較論の構成は、ミメーシスとそのタブーをめぐる議論の構成と対応している。ミメーシスが自然の模倣であり、仮象の揺らぎが主体を融解し、同一性の根本的な崩壊をもたらすという特性が、丸山によって翻訳され、日本の戦争指導者の心理分析となつて再現されているのである。

彼ら（日本の戦争指導者——引用者注）に於ける権力的支配は心理的には強い自我意識に基づくのではなく、むしろ、国家権力との合一化に基づくのである。従つてそうした権威への依存性から放り出され、一箇の人間にかえつた時の彼らはなんと弱々しく哀れな存在であることよ。だから戦犯裁判に於いて、土屋は青ざめ、古島は泣き、そうしてゲーリングは哄笑する。

だが一箇の人間が国家権力に埋没し依存することによって戦争指導者たり得たということは、ミメーシスを単に自然の模倣、

理性的主体の融解とのみ理解することによっては、説明がつかない。いうまでもなく近代戦争の指導者にとって、時間と距離を効率的に算出する輸送テクノロジーは必須であって、近代の科学技術を駆使する理性的主体であることが必要であるからだ。

丸山が描き出す日本の戦争指導者の姿には、ミメーシス的な理性的主体が融解していく構造と、そうした構造を隠蔽しタブーとして排斥することで、理性的主体の維持を図ろうとする文
明史的な方向性との双方がはり合わされた形で現れている。プラトンの政治とアリストテレスの芸術とが、前者が後者を隠しきれないまま、双方がまさにあられもない姿で絡み合っている。そうしてその無残にも曝け出された羞恥の図こそ、日本の超国家主義と称されるものの正体だったのではないか。

あるいはミメーシスこそが、それを羞恥し隠蔽し理性的た
らんと欲する主体を喚起している当のものなのだ。その意味で、ミメーシスとは理性的主体の自然への融解でありつつ、同時に支配の理性を喚起し、ミメーシスそれ自体を隠蔽排除すること
で文明史を形成するエネルギーの源泉だといふべきであろう。

日本の戦争指導者が主体観念を有していないのと同様、天皇の存在が帯びる価値もまた、天皇に内在する主体性にその源泉があるのではないと丸山は述べる。

天皇を中心とし、それからのさまざまの距離に於いて万民が翼賛するという事態を一つの同心円で表現するならば、その中心点は点ではなくして実はこれを垂直に貫く一つの縦軸にほかならぬ。そうして中心からの価値の無限の流出は、縦軸の無限性（天壤無窮の皇運）によって担保されているのである。

戦争遂行の手段として必須の科学的理性は、このようなま
さに自然への主体融解の現場に根を張っているのである。丸山は
このように分析を進めながら、東西国家比較論が必ずしも両者
の本質的な相違を結論しないこと、従ってまた、敗戦後の日本
に課された近代化のコースが、戦時下の日本の国家理性と必
ずしも断絶したところからスタートするのではないことを、認
識せざるを得なかったはずだ。すなわち問題はやはりミメーシ
スであり、東西の国家論的差異はミメーシスの喚起する文明史
的な啓蒙的理性の強弱に還元し得るのである。

完全な中性国家においてすら、その体系的合理性の基盤には
合理的主体が融解する自然の層が横たわっているのであり、隠
蔽され続けなければならないその自然の層が、あられもなく露
呈している日本の超国家主義は、完全な中性国家においてほむ

しろ見えにくくなっている近代国家の二層構造を明らかに示しているということになる。そしてまた論文末尾周知の一文「日本軍国主義に終止符が打たれた八・一五の日はまた同時に、超国家主義の全体系の基盤たる国体がその絶対性を喪失し今や初めて自由なる主体となった日本国民にその運命を委ねた日でもあったのである。」が意味するところも、あるいは丸山が唱えたとされる八・一五革命説が意味するところも、単に政体の転換、国体からの解放を指摘したものと理解することはできない。むしろこれらの言説は、近代国家日本の二層構造を踏まえつつ、ミメーシス的な自然の層を如何に馴致し、文明史の方向に沿った啓蒙的理性を強靱に育てていくかという意味において、近代にはじめて訪れた自己確立の好機到来の宣言とみたほうが丸山の真意に沿うものであるだろう。

丸山は日本の民衆的エトスが自然の層に主体を寄り添わせるミメーシスの心性に近いことを知っていたであろう。そのことと近代天皇制の驚異的な影響力との密接な関係にも想到したに違いない。日本人に顕在的に表れるこうした心性が、しかしヨーロッパの主権国家の伝統においては、なぜ厳格に封印されなければならなかったか。厳密な意味で中性国家であろうとする、そのヨーロッパ的欲望はどこに起因するのか。「超国家主義の

論理と心理」の論述は、「十六、十七世紀に亘る長い間の宗教戦争」「信仰と神学をめぐる果しない闘争」を、その理由として挙げている。

異なる神を信ずる者を赦す〈寛容〉の精神が、血で血を洗う宗教対立から確立されていったこと、そしてまたそのようなヨーロッパの伝統が厳密な中性国家への欲望となって定着したことは理解できる。しかし、封建制と王政が不在であり、宗教戦争を経験していないアメリカや、日本を含む近代の後進国において〈寛容〉の不在を説いても意味はあるまい。

M・ホルクハイマーとTh・アドルノの共著『啓蒙の弁証法』⁽²⁾に拠りつつ、ミメーシスを理性の原初形態であり、自己保存の二層構造をそこに見ることができるとする上野成利は、自己保存の二つのルート、すなわち理性の重層構造について次のように述べる。

こうして『啓蒙の弁証法』によれば、「他者への有機的な適応」こそ「本来のミメーシス的なふるまい」なのであり、人間はまずはこうしたミメーシスをつうじて自己保存を図ってゆくとされる。そしてこのミメーシスこそが自己保存を旨とする理性の原初形態にほかならないというわけであ

る。(中略) ミメーシスには自己保存を脅かすような性質がそなわっているとすらいえる。というのも、ミメーシスが「他者への有機的な適合」なのだとすれば、それはとりもなおさず主客未分の混沌のなかに自己を解消させることも意味するからである。つまりミメーシスというのは、人間にとって自然の脅威を克服して自己保存を可能にしてくれる通路でありながら、しかも同時に自己を環境の中に融解させる契機をもはらんでいるのだ。

〔暴力〕³

宗教戦争の長く暗い時代の体験をもったヨーロッパにおいて顕在化し、非ヨーロッパ圏の主権国家において潜在的に存在する層として、ミメーシスの自己融解への強烈的な欲望と、それに見合う形で派生するそれへの恐れ。そうした隠された欲望とそれへの禁忌ないしは嫌悪の感情が、ヨーロッパにおいて典型的に表れる法実証主義的形式主義を生んだのだ。そしてこの欲望と嫌悪の二つの層が織りなす葛藤は、様々なヴァリエーションを伴って、全ての主権国家の文化構造を深く規定している。

その意味で、超国家主義の日本と敗戦後の日本の文化構造は変化していないというべきである。構造は不変であり、国民の心理においてミメーシスの心性、端的にいつてそれは死を美化

する心性にほとんど重なっているが、そうした日本浪漫派的な敗北の美学をどこまで反復するのかという心理的なレヴェルでの課題が、敗戦後の日本国民の胸に重くのしかかったのである。その重圧感は第一次戦後派の作品に明らかであって、丸山眞男にとつてもその重圧は非常に大きなものであったに違いないのだ。

丸山眞男はこの論文を、八・一五以前の日本が構造的には八・一五の敗戦によつては全く変化していないことを十分に認識し、その苦い思いを噛み締めながら書いていたというべきだろう。

一五年にも及んだ戦争が近代日本国家の深層構造から必然的に出来たものであること、従つてこの経験は常に反復されうるものであること。こうした認識がなければ、この論文は書かれていなかった。

『現代政治の思想と行動』の「追記および補註」をここに引用しよう。⁴

ただ、読者はどうかこの論文だけからして、私が明治以後の日本国家の発展、ないしはイデオロギーとしてのナシヨナリズム思想における進歩的なモメントや世界共通性を無視し、「前近代性」と「特殊性」で一切をぬりつぶす論者だったと断定しないでいただきたい。(中略)

本論文の「抽象」が一面的だという批判は甘んじて受けるけれども、他方ここで挙げたような天皇制的精神構造の病理が「非常時」の狂乱のもたらした例外現象にすぎないという見解（たとえば津田左右吉博士によって典型的に主張されている）に対しては、私は当時も現在も到底賛成できない。この大きな問題に立入るかわりに、ここでは差当りヘーゲルの歴史哲学における次の言葉を掲げて私の答えに代えよう。

「こうした（中世教会の）腐敗墮落は偶然的なものと呼ぶわけには行かない。それは必然的なものであり、ある既存の原理の首尾一貫した発展に他ならない。（以下略）」

「天皇制的精神構造の病理」は「ある既存の首尾一貫した発展」として必然的なものであり、決して「例外現象」ではなかった。だとすればその「首尾一貫した」構造は敗戦によって崩壊しないし変容したと考えることは許されないのである。そしてまた「進歩的なモメントや世界共通性」と「前近代性」「特殊性」とを対立させることによつては、東西国家比較論としても、戦時戦後の日本国家論としても、問題の本質を取り出すことにしにくるのであつて、世界普遍性と日本の特殊性という二項は、それぞれ

れ主権国家の自己保存のルートのいわば二つの極限のあり方として理解しなければならないはずだ。

したがつて敗戦後の丸山眞男が重い課題として背負つたものは、日本近代の国民・国家が一五年に及ぶ戦火を経て、自らのこの経験を自らの内側に取り込むことであり、例外的あるいは天災的災厄として自我の外部に投影（Projection）し、それを殲滅的に葬り去ることを拒絶し続けることであつた。「自由なる主体となつた日本国民」（「論理と心理」とは、そのような課題を背負う者以外ではない。

「ミメーシス概念に含まれる自己保存と自己融解の二つのベクトルの相克は、エロスとタナトスの相克というフロイト的な議論を翻訳したもの」だと前掲上野成利は述べている。丸山はこうした対立的側面を結ぶ層として、日本近代の国民・国家が最適な自己保存のあり方として、エロスよりもタナトスを選んだという事実面に直面せざるを得なかつたのである。自己保存が自己融解によつて可能になるというこの逆説は、しかし日本浪漫派をみるまでもなく理解可能な日本的パラダイムであつた。そしてこの逆説こそが敗戦後の再近代化コースを走り始め、復興の槌音の響きわたる中でなお問題としてあり続けたということとは、丸山が以後継続的にとり組んだ日本ファシズム研究によ

って明らかなのである。

II 「顔の中の赤い月」——ミメーシスの円環

野間宏が「顔の中の赤い月」(『綜合文化』一九四七年八月号)に描いたのは、主人公北山年夫を愛しながら、北山の「恋人の代理」でしかなかった一人の女の死、そのあまりにも報われることの少なかった女性の死を、北山年夫がどのようなかたちで受け入れるか、どのような意味としてその死を理解するかという問題にほかならない。

病弱な彼女が死んだのは、北山年夫が「軍隊に行きまだ内地にいる時分」であった。

「あたし、あなたを愛する以外に生きる道がないの、あなたにどう思われようと。」彼女はよく手紙に書いた。そして、「いつか、あなたにも、あたしの心がわかつて頂ける日がくるわ。多分、そのときには、あたしは、死んでしまつてるでしょうけど……。」と彼女は云つた。そしてその彼女のことを考えるとき、彼女のこの平凡な言葉の内にある彼女の心の存在が彼の胸を突刺し彼は自分があらゆる苦しみを受けるに価すると考えるのだつた。

彼女が残したこれらの言葉は、この女性の生の意味が、生き続けることによつてすら、完結はしないことをよく表している。生きることが彼女の目的なのではなく、「あなたを愛すること」だけが意味を持つているのであるから。死によつて生命が終焉を迎えることは、ついに愛されることのないままに終わった人生としてではなく、彼女にとっては愛することの終わりであり、「愛する以外に生きる道がな」かつたこの自分の人生が迎える必然の終焉の姿である。

その必然の終焉を、彼女は北山年夫に伝えようとした。「死んでしまつ」たこの私の必然の終焉の意味を、彼女は彼に手渡そうとしたのである。そうであるなら、北山年夫は彼女を愛さなかつたことを悔いるのではなく、むしろ生前の彼女が自分をおのよな思いで愛したという事実を、全的に理解し、その思いに一体化しえない自分の心をこそ責め続けなければならないであらう。

彼女が死んでなお、彼女の愛の形が見えてこない北山年夫の焦りが、エゴイズムの形をとることによつてかろうじて北山自身の自責の念を喚起するかのようだ。だが精細に彼の苦しみをたどるなら、北山年夫の苦悩は彼が決して彼女のように人を愛せないという自覚からしかやつてこないことがわかるだろう。

彼を苦しめるのは、彼のエゴイズムなのではない。彼女は理解を超越したところに生きていた。そしてその超越点において死んだのである。

彼女の死は、北山年夫が「支那から南方の戦線に出て行」き、「熱帯の大きな赤い月」の下を「急行軍」で移動し続け、「坂道を一步ふみ出すためには多大な血液を失わなければならないよ」な苦痛に耐えながら歩いていた「サマツト山」の坂道で、再度彼の目前に姿を現す。それは「列の最後尾」を軍馬の手綱を握りながら歩いていた「魚屋の中川二等兵」の死である。

「俺はもう手を離す。もうはなす。」中川二等兵のこの声で、北山年夫は戦友の体力が完全につきたことを感じた。この語尾の方が次第に細くなり、最初北山年夫に対して呼びかけようとしていた語調の中から、その呼びかけが失われて、何か自分自身に云いきかせているような、或いは、人生の最後に、彼の意識が彼の全人生をかけめぐっていることを示すような哀れなその言葉は、北山年夫の心の底にとどいた。(中略)彼は中川二等兵の声に自分の心がささい込まれて行くのに抵抗しながら黙つて歩きつづけた。

中川二等兵は北山年夫への「呼びかけ」をやめ、「その呼びかけが失われて」からしばらくの間「もう手を離す。」というつぶやきを「自分に云いきかせている」かのように言葉にしながら最後の数歩を北山とともに歩いたのである。そのわずかの間の最後のつぶやきに、「自分の心がささい込まれ」そうになった北山年夫は、かろうじて「抵抗しながら黙つて歩きつづけた」という。

このときの北山年夫は、現実世界の愛を超越した地点で、自分を残して死んでしまった彼女の生と死の意味を永遠に捉え損ねて苛立っていたのである。彼女の死は彼のエゴイズムを責めるもののにすり替わり、彼の孤立感は激しい自責をともなうものに化していた。中川二等兵のつぶやきが、あきらかに現実世界に届く響きを失つていこうとするとき、北山がとつさに中川二等兵の後を追おうとしたとしても不思議ではない。中川二等兵と同じ死の中に北山もまた一緒に入っていけるなら、一人の人間が最期の了解を自らの死について下すその瞬間が、どのようになその人間に到来するのかわかることができるであろう。だが生死は人間を分かつのだ。

彼女の死と中川二等兵の死は、北山年夫に救うことができた死であつただろうか。このように問うた時、生き残つた北山年

夫は救うことができたか、少なくとも救うべき死であったと考
えるであろう。だがこの問いかけは、作品の主題を問う角度を
誤っている。なぜならこの問いには、生き残ることが無条件に
良いこと、幸運なことという前提が含まれているからだ。命を
粗末にしてよいという話ではない。死を自らに引受ける瞬間の
生者にとって、死は生に転位するのではないかということなの
である。

すでに言及したように、ミメーシス概念には、自己保存とし
ての自己融解が含意されていた。だが自然の模倣であると規定
したアリストテレスのミメーシス概念は、文明史の下層に伏流
として封印されていくことになる。すなわち自己保存とは死で
はなく、常に生であり、死を回避するための擬態 (Mimicry) が
自己保存を可能にするのであって、ミメーシスが自然の模倣で
あるのは、そうした意味で行使される理性を含む限りにおいて
であるのだと。

だが、北山年夫の周辺に起こった二人の死は、生き残った北
山を苦界に取り残し、エゴイズムという負債をすら彼に与えて
孤立を強いている。彼女は既に病弱の身で、愛されないまま死
んでいくことを必然として受け入れており、中川二等兵は「奴
隷の綱で引きずられてきた身体をようやくにして死によつて解

放したことを示そうとするかのように、彼は砂の上でかすかに
頭を振り倒れた」のであった。

この二人の死を、戦後復員した北山年夫は依然としてエゴイ
ズムの問題として背負おうとしていることは明らかである。

どうしようもなかつたんだ。そして俺は、いまもまだあ
のときの俺なんだ。あの時と同じ状態に置かれたならば、
やはり俺はまた、同じように、他の人間の生存を見殺しに
する人間なのだ。たしかに俺は、いまもまだ、俺の生存の
みを守っているにすぎないのだ。そして俺はこのひとの苦
しみをどうすることも出来はしない。

復員した北山年夫の前に現れた堀川倉子は戦争で夫を亡くし、
会社勤めをしながら「売り喰い」で生活する身である。敗戦の
困窮を生き延びるには、彼女の生活基盤は弱すぎる。しかし「売
り喰い」によつて当座をしのごほかどうすることもできない堀
川倉子は、現世に留まろうとする自己保存の欲求をついに死に
よつて代置し、「サマツトの坂道」の「砂埃の厚くしきつめた中
に自分の生命を埋める道をえらんだ」中川二等兵と同じである。

彼は彼女が遂にはこの敗戦の世を、生きることができないのを感じていた。「そのうちに食えなくなるのだ……今月から少し給料がよくなるようだが、すべては、食費にいつてしまうのだから……このひとの会社にしても同じことだろう……。」そして彼は眼の前の彼女の体が、次第に容積を減じ生命の充実を失い、どこかへ、粉のようにとびちつてしまうかのように想像する。

「恋人の代理として」死んだ女性と中川二等兵、そしてこの堀川倉子は、生ききるための理性ではない別の理性によって生きただといえる。その意味でこの三人は互に相手に自己を似せることによって、ある種の自己保存をなし遂げているといえるのだ。この三者がミメーシスによって結ばれており、その類似性によって生き延びているといえるのは、戦時の死者の個々の死が、敗戦後も全く同じようにして反復され、敗戦によって死の原因こそ変化したものの、敗戦後の生活の困窮は死を必然のものとして了解することを多くの庶民に強いていることを、政治や経済の問題としてではなく、近代日本の文化構造の必然として読者の眼前に提起するからに他ならない。

クラウゼヴィッツは「戦争とは別の手段による政治の継続で

ある」（『戦争論』）と書いたが、たしかに戦争の終結は政治の断絶を意味してはいない。八・一五の激変は、戦時下の女性の死、前線に於ける兵士の死、敗戦後の孤独な女性の生を何一つとして救い上げることができなかった。北山年夫の思考に深く根ざす近代的自我史観は、死者を前にしたときエゴイズムの烙印を自らの額に焼き付けて苦悩することしかできなかった。

ミメーシスの原初の理性だけが、北山を除く三人の弱者を救っているのではない。しかし、この救いに北山年夫が強く反発しているのは見てきたとおりである。たしかに北山の考えるエゴイズムとヒューマニズムとを結ぶ線上に、戦後の新しい地平を遠望することも行われたのではあるけれども、この線上には自己融解が自己保存になるというミメーシスの原初形態を根底から変革する思想が備わっていなかった。

彼は堀川倉子の白い顔の中でその斑点が次第に面積を拡げるのを見た。赤い大きな円いものが彼女の顔の中に現われてきた。赤い大きな円い熱帯の月が、彼女の顔の中に昇ってきた。熱病を病んだほの黄色い兵隊達の顔が見えてきた。そして遠くのび、列をみだした部隊の姿が浮んできた。

ミメーシスの円環。堀川倉子の「白い顔」は「赤い大きな円い熱帯の月」となり、「熱病を病んだほの黄色い兵隊達の顔」へとさらに円環は伸びていく。この円環は「不幸な戦争を経てきた人々の多くの胸の中にしずかにはいつて行く」「柔かい夕暮れの色」とも照応していることだろう。

「顔の中の赤い月」に描かれたこのミメーシスの連鎖は、戦後啓蒙思想によって断ち切られることなく隠蔽されたのだといつてよい。GHQによる初期占領政策は、日本人のこのミメーシスを逆利用することで巧みに親米国家を作り上げていった。

丸山眞男は戦後啓蒙の立役者でもあったが、彼にはこの「赤い大きな円い熱帯の月」が日本の戦後空間を「柔かい夕暮れの色」となって照らしだしていることが見えていた。そこに浮かび上がる数々の顔が、自己保存としての自己融解という矛盾の中に生きていることが、丸山にとって最大の思想課題であったのである。

敗戦後の再近代化が、日本の文化構造にとって諸刃の剣であることは、丸山眞男には自明のことであった。戦後思想は「進歩的なモメントや世界共通性」と日本の「前近代性」「特殊性」の両極の間でいかようにも構成されうる極めて恣意的な思想となることを避け難いからである。その痛切な認識の上に立ち「私自

身の選択についていうならば、大日本帝国の『实在』よりも戦後民主主義の『虚妄』の方に賭ける。」⁽⁵⁾と丸山は語ったのである。

結び——太宰治のミメーシス戦略

戦後復興によって敗戦後の「柔かい夕暮れの色」のような「大きな円い熱帯の月」の如き原初的ミメーシスは、死との隣接性を失って、権力統治による法維持的理性の性格を強めていく。自己保存のために自然を模倣するミメーシスは、次第に自然の側を自己に引きつける倒錯となって、自己像との差異に極めて敏感な法維持的暴力にまで変質することになる。

敗戦後文学の課題が、まず原初的ミメーシスが帯びる死との親近性を戦後の時空にどう描き出すかにあったとするならば、昭和二三（一九四八）年あたりから顕在化するGHQによる占領政策の転換は戦後文学に大きな変質をもたらす結果になった。すなわち、昭和二三年は中国大陸に於ける国共対立の最終局面を迎えて共産主義の拡大が決定的になった年であった。アメリカ政府はこの年、経済安定九原則を打出し、日本の経済の安定・インフレの抑制を目的とする九項目にわたる経済政策を指示し、防共拠点としての復興を急ぐことになる。

法措定的暴力と法維持的暴力を兼ね備えた支配の暴力

(Gewalt) と化した自己保存的理性としてのミメーシスは、逆コースと呼ばれる五〇年代を目前にして、敗戦後文学の原初的ミメーシスを正面から切り崩していくことになる。

太宰治はそのような時期に「人間失格」⁽⁶⁾をはじめとする作品を書くことで、ミメーシスの変質に対抗した作家である。すなわち支配の暴力が強制する均質化と差異化、境界の画定と他者なるものの外部への排除といったこの時期に顕著に現われ始めた動向に対し、自己放棄によって自己保全を図る原初的ミメーシスの極限の形を描き出した。

「人間失格」は「昭和五、六、七年」頃の東京を背景に「非合法」「日陰者」であることの快楽を描き、原初的ミメーシスに固有の主体融解感覚を極度に前景化した作品である。強権による支配の暴力の及ばぬ領域へと浮遊するこの主人公の役割は、支配の暴力から「私事」の「内容的正当性」(「論理と心理」)を奪い返すことにほかならない。

太宰は、「私事」の実体的な価値が国家やあるいは超越的な權威によって与えられるものではないということ、だがまた制度的暴力を含むあらゆる関係性を回避し、自然を模倣し自然のなかに融解していく純粋な「私事」には、倫理の内面化が稀薄となり、自己保存のための倫理であるよりむしろ死への了解とし

ての倫理となることなどを、克明に描いたのである。太宰治の作品は原初的ミメーシスの自己融解感覚と自己保存的自意識の二層構造を、最も良く示すものの一つであるといえる。とりわけ昭和二三年の太宰の諸作には、戦略としてのミメーシスが描ききられているのであり、この点において、ミメーシスの二つの層を東西国家比較論、日本文化構造論のなかに二つの対極として仮構した丸山眞男の方法意識と見事に共振する位置に、太宰治は立っていたといえるのである。

(注)

- (1) Th.アドルノ『美の理論』(大久保健治訳 河出書房新社 一九八五・一)
- (2) M.ホルクハイマー、Th.アドルノ『啓蒙の弁証法』(徳永恂訳 岩波書店 一九九〇・三)
- (3) 上野成利『思考のフロンティア 暴力』(岩波書店 二〇〇六・三)
- (4) 引用は丸山眞男『増補版 現代政治の思想と行動』(未来社 一九六四・五) 巻末の「追記および補註」
- (5) 引用は『増補版 現代政治の思想と行動』巻末の「増補版への後記」
- (6) 太宰治「人間失格」(『展望』一九四八・六、一九四八・八)

(やまさき まさずみ・本学教授)